

釧路湿原自然再生協議会再生普及小委員会
第23回再生普及行動計画ワーキンググループ議事要旨

日時:平成24年11月5日(月)18:00~19:57
場所:釧路地方合同庁舎 4階 第三会議室

【出席者(敬称略)】

<個人>

- ・ 新庄 久志 釧路国際ウェットランドセンター主任技術員・環境ファシリテーター
- ・ 高橋 忠一 再生普及小委員会 委員長

<団体>

- ・ 釧路湿原国立公園ボランティアレンジャーの会 中島 忠雄
- ・ 釧路市民活動センターわっと 成ヶ澤 茂
- ・ 釧路国際ウェットランドセンター・釧路湿原国立公園連絡協議会 菊地 義勝

<関係市町村>

- ・ 釧路市 環境保全課 湿地保全主幹 菊地 義勝

<関係行政機関>

- ・ 環境省釧路自然環境事務所 所長 西山 理行
- ・ 環境省釧路自然環境事務所 野生生物課課長 大林 圭司
- ・ 国土交通省北海道開発局釧路開発建設部治水課 治水専門官 稲垣 達弘
- ・ 林野庁北海道森林管理局釧路湿原森林環境保全ふれあいセンター
自然再生指導官 朝倉 基博
- ・ 北海道教育庁釧路教育局教育支援課 社会教育指導班主査 清水 秀紀

<再生普及行動計画ワーキンググループ事務局>

- ・ 環境省釧路自然環境事務所
国立公園・保全整備課課長補佐 高見沢 敏男
釧路湿原自然保護官 竹中 康進
- ・ 公益財団法人北海道環境財団 事務局次長 久保田 学
清水 美希

【議事概要】

第23回再生普及行動計画ワーキンググループ(以下「行動計画WGと表記」)を開催する。資料確認後、各自自己紹介。(新規には環境省釧路自然環境事務所 西山所長、北海道教育庁釧路教育局 清水主査、釧路湿原国立公園ボランティアレンジャーの会 中島氏)(新庄座長による進行)

議事1. 2012年度再生普及行動計画WGの取組進捗状況

事務局より行動計画WGの経緯について簡単に説明のうえ、資料1-1、1-2、1-3に基づき、今年度の行動計画WGの活動状況、実施・進捗状況を報告した。今年度の新たな取組としてワンダグリンド普及シールのワンダグリンド応募者への配布、前回のWGでの検討したワンダグリンド応募者間の交流座談会を開催した。フィールドワークショップではキラコタン岬先の湿原に行き、湿原と水位、景観との関係、土砂流入状況を確認した。次回は1月末～2月上旬で冬の久著呂川に行くことを予定している。再生普及行動計画のホームページを今の仕様に合わせリニューアル中である。また、自然再生パネルや航空写真の貸出をスタートさせており、ぜひご利用、ご紹介いただきたい。自然再生現場の見学会を達古武森林再生現場、幌呂湿原再生現場で開催した。幌呂では、開催日が地元の学校の学芸会と重なり参加者が少なく、次回の反省点である。幌呂では冬にも現場見学会を予定している。重点分野である「自然再生に参加する・行動する」を拡大させていくために、6～8月を「自然再生の市民参加集中期間」と位置づけ、ワンダグリンドの取組の中で一般参加ができるものを集約・PRした。知名度アンケート調査では大きな変化はなかったが、今回は新たに「市民参加の自然再生イベントがあれば参加してみたいか」という設問をしたが、約7割が「参加したくない」とのことであった。次回以降はその理由も設問し、それを踏まえ今後の活動に生かしていきたい。

議事2. 「ワンダグリンド・プロジェクト2012」中間報告

事務局より資料2-1、2-2に基づきワンダグリンド・プロジェクト2012の進捗状況を説明した。新規にNPO環境把握推進ネットワーク～PEG、酪農学園大学環境地球化学研究室が加わり、50団体74取組の登録となった。参考資料のワンダグリンド・プロジェクト2012は年明けより集約し報告書を作成する。

議事3. 「ワンダグリンド・プロジェクト2013」募集(案)について

事務局より資料3に基づきワンダグリンド・プロジェクト2013の募集について説明した。いままで同様、2～3月の集中期間で募集を行うため、周知等にご協力いただきたい。前回の小委員会での検討の結果、ワンダグリンドの公開を来年度は4、5月に行うWGを経て公開とする。

議事4. 第2期再生普及行動計画の中間評価について

事務局より資料4に基づき中間評価(案)を説明した。全体評価として①ワンダグリンダ・プロジェクト登録数からは規模を維持しており評価できるが、第2期行動計画の重点目標である「自然再生に参加する・行動する」の増加には直結していない。②ワンダグリンダ応募者に行動計画の趣旨が必ずしも認知されていない。③各イベントの参加者には取組みに関しての一定の評価が得られるが、情報発信の拡充の必要性がある。④この8年間での構築したネットワークに加え、各小委員会、自然再生事業実施機関との連携を進めていく必要があるのではないかととりまとめた。

座長 第2期行動計画の中間評価はこれでよいか。

委員 表2でワンダグリンダ・プロジェクトの活動目的を表にしているが、複数選択では実施数とは母数が変わるので%値は実態を意味しない。

委員 分析の仕方は専門家であれば、もう少しいろいろ引き出せるかもしれない。

座長 統計的有意性は論じられないので、実数だけが評価の対象か。

委員 かつ、第1期と第2期は分類が違うので比較できない。

委員 一進一退に見えるが、実態はどうかを見てみないとわからない。

委員 第2期の行動計画は3つの柱にまとめた。「釧路湿原を知る、楽しむ、学ぶ」は初歩的なことで、関心が高まるにつれて「自然再生に参加する、行動する」し、さらに「地域に関わり、人をつなぐ」という進化を想定したが、実際にはその順とは限らず、いろいろな入り口や経路がある。

委員 活動が3つに単純に分けられるわけではない。それはきちんと評価する必要がある。見込んだとおりの成長ではなく、逆方向もある。そのことも入れた方がいい。

委員 年間を通じて市民と接する機会があるが、活動への意識の高さを感じる。ただ、3ヶ月前に市役所の仕事に対して事業仕分けがあり、ウェットランドセンターの活動を説明した。委員8名は湿原のことを知らないか、または、接する機会のない人ばかりだった。結果的には重要性はわかってもらえたが、具体的に「何をしているのか分からない」というコメントがあった。普段私が接する市民は関心が高く湿原についてよく知っているが、そうではない人たちも多く、例えば湿原のことは知っているし自然再生のことも新聞等で見たことがあり、自然の大切さや湿原のことは「認識」しているが、いわゆる「認知」するまで行っていない。自分の生活と環境とのつながりを認めるが、詳しく知るまでは行っていない。これは、我々のPRの不足でもある。ワンダグリンダのようにたくさんの人たちが活動していても、自然の好きな人が集まるっていることが多い。それ以外の人に自然の価値をどのように認知してもらえるかを考えなければならない。

座長 みんな知っているが、日常生活とのつながりや取り込み方はわからない。「参加」とは何なのか、どうすれば参加できるのかも、まだ全然届いていない。一般の方にどう届けるか、それが私たちの課題。

座長 そうしたことを受けて、私たち WG は何をしていくか、次に考えたい。

議事5. 今後のWGの取組についての検討

事務局より資料5に基づき検討方法を説明した。

- 時間をとって（40分）第2期行動計画の後半のWGに必要なことを各自考え、ポストイットに書いてもらう。
- ポストイットをホワイトボードに貼りだし、全員で眺めながら分類した。

座長 情報発信の方法として、講座等をやるもの、町内会などに出て行ってPRするもの、芸能人なども念頭に幅広くPRするものなどフィールド以外のところへ出向くものと、現地見学・意見交換、ウチダザリガニバスターズ、学校でのワンダグリンダクラブ、流域を対象としたツアーなどフィールドに来てもらうものと大きく2つに分けられる。どちらも今まであまり交流がないところへアプローチをしていくものである。

委員 全体として共通しているのは、情報も行事も自分たちがつながっているところが対象になっており、そうでないところに如何につなげるかを考えることでは。

座長 今までアプローチをしていないところに出ていくといい。これまでは、こちらの自然再生に参加しやすいよう企画をしてきたが、逆転の発想で、これまで無関係なところに出て行き、相手の活動の中で自然再生をPRするよう企画をする。ワンダグリンダのメリットも必要。

委員 湿原を上からみるといい。気球を飛ばしてはと先日副大臣が来たときに繰り返していた。

座長 気球は以前あった。降りる場所が難しいらしい。

委員 湿原を自分にとっての里山としてどのように認識するかが大切である。先週、東京で関係者の集まりがあり感じたことだが、釧路湿原も里山として私たちの生活にどんな関わりが出来るか認識するべきである。

座長 浜中はまさにそうした発想。

事務局 湿原が自分にとってメリットとなることを前面に出すことが、市民の関心を得て、湿原の保全に繋げられるのではないかと。

座長 これを具体的にどう現場で使っていくか。今までと異なり、湿原を生活の身近にあるものとしたアプローチをしていく必要がある。一般の人たちを巻

き込んだフィールド活動である。

委員　今回クレインズを巻き込んだが、どうだったか。

事務局　実際にはクレインズ目当てで来たのは5人くらいだったが、熱狂的なファンは繰り返し来てくれた。

事務局　クレインズが好きな人たちのところへもっとイベントのPRをすればよかったと反省している。

座長　こちらの活動にクレインズを使うのではなく、クレインズの活動に我々が出て行くことだ。町内会も同じで、町内会の活動に我々がどう出て行くか。

事務局　町内会の年間行事に我々の活動を売り込むのを考えている。

座長　去年から業者のツアーを頼まれてやっているが、同じツアーの繰り返しだが一杯になり、感動して帰る。それは、茅沼地区や下幌呂地区の自然再生現場に連れて行くが、観光客はよるこんでいる。地元の人も参加すると楽しいのではないかと思え、地元対象の観光ツアーをやってもいいと思う。

委員　第2期行動計画の書き方は、1→2→3に成長するイメージがあるが、1も行動計画としては、「そうした機会を提供する」ことで自然再生に参加している活動であり、継続すべきこと。これまでの登録者は、そこを理解してくれているわけではないのではと思う。自然再生協議会は、「評論家」ではなく何らかの形で「参加」する人だけで構成されるべき。河川の復元や森林の再生への参加は難しいが、普及（教育）ならできるといふ人もいる。「教育という活動を行う人」も大事な参加者。

座長　得意分野での参加が力になるという視点、そうした意味づけ、リードをすることもWGの大事な活動である。その取組が自然再生だと気付かせる発掘の仕方が必要である。

委員　そう考えると苗木育成もまさしくそのもの。山に行けなくても苗を育てることで貢献している。しかし、人は中々増えない。

座長　裾野を広げることは、町内会など今あるものをつなげ、そうした身近な暮らしに湿原をつなげてあげることでもある。

事務局　第2期行動計画の後半は、いただいたアイデアから、力を入れていくことを整理して小委員会に報告していく。

議事6. 今後のスケジュール

事務局より資料6に基づき今後のWGの活動予定を説明した。

その他

委員 来年（2013年）は1993年のラムサール条約釧路会議から20周年を迎える年にあたる。当時は、地域にとって初めての国際会議で、いろいろな人が関わった。例えば、8日間の会議で96カ国の国旗を、朝夕延べ3000人以上の子どもたちがボランティアで国旗掲揚した。あの盛り上がりをもう一度、ということで、子どもラムサール会議や、その時に登録された他の湿地の人を呼んでトークするなど、イベントを考えている。実行委員会をつくった方が良いと思う。20年前は、湿原にあまり関心のなかった人たちも巻き込んで会議を手伝った。今回は、「COP 釧路+20」として気候が温たくなる6月下旬から7月にかけて行い、多くの人に参加してもらいたい。ワンダグリンドの趣旨とも合うと思うので、是非連携してやっていければと思っている。

座長 とにかくいろんなところに売り込むとよい。先日の教員研修で釧路川を下ったことを話したら、自転車をやっている人がそれに大変興味を持っていた。そうした「釧路湿原ネタ」を売り込むことでは。

委員 ワンダグリンドのキャラクターはないのか？

事務局 一応、ヤチボウズとキタサンショウオを使っている。まだ名前はない。

座長 PRをした方がよい。ウェットランドセンターにも「やちべえ」がいる。標茶高校ではヤチボウズのゆるキャラをすでに作っている。

委員 3年前に韓国昌原で開かれたCOP10ラムサール会議の会場にはタンチョウのぬいぐるみが登場していた。

委員 コウノトリもトキも言われれば気づくゆるキャラがある。

委員 こどもが抱きつきたくなるようなホワホアしたゆるキャラがあるとよい。

第23回行動計画ワーキンググループを閉会した。

以上

議事5.「今後のワーキンググループの取組についての検討」で出されたアイデア

●「自然再生」を色々なところに出ていき伝えるアイデア

- ・ 湿原ワンポイント講座を定期的を開催する
- ・ 湿原に関わる多様な人々を招いての「トーク会」を行う。
- ・ 町内会などをまきこむ
- ・ 釧路湿原で映画を
- ・ 自然再生を伝える人が増えるとよい（研修会や養成講座？）
- ・ 芸能人が自然再生をPR
- ・ 地域の方達と継続的に関わられるような取組
- ・ イベントをしても同じ人ばかり集まる事が多い。車のイベントやスーパーのイベント等にも参加したらよいかも。
- ・ これまであまり交流のなかった層への働きかけを考える（例えば大学生、主婦、おじさん・・・）

●湿原をフィールドに「自然再生」を知ってもらおうアイデア

- ・ 現地集合、現地解散の湿原ツアーを行う
- ・ ウチダザリガニバスターズを作り、子ども達と湿原の色々な場所で実施する。年間グランプリを発表する。
- ・ ぜひ他の小委員会に協力してもらって、新たな参加企画を作り出す。
- ・ 子供パークレンジャーの活動をもっと積極的に進めたらどうか（学校にも案内を）
- ・ 各学校（小5）でワンダグリーンダクラブを作る。年4回前後のプログラムを作り、自然再生員？を与える。
- ・ 再生事業地を訪ねるツアーを行う。
- ・ 自然再生の地元向けの情報発信（現地見学会と意見交換）
- ・ 子どもを対象に普及活動を行う。
- ・ キノコ+湿原、魚+湿原、山菜+湿原など湿原+αで参加者を増やす。
- ・ 流域（水の流れ）を体験できるツアーの開発を

●多様なPR手法のアイデア

- ・PR不足？キャラクターは？
- ・湿原が生活に身近ではない。
- ・保護＝ふれない。
- ・自然再生（湿原）が一次産業と如何に関わりがあるか
- ・参加者の固定化。仲間求む。
- ・自然再生に参加、行動の活動への参加者へ他の活動PRを行う→参加者の増加と他活動を知ることもつながる。
- ・応募パンフに「3つの柱」の中身をキチンと記載
- ・ワンダグリンダに参加するグループの横のつながりを強める。
- ・ワンダグリンダの「メリット」をうちだせるとよい。
- ・ワンダグリンダの評価と味付け
- ・得になる人を巻き込む。
- ・PR不足というより、PRの手法（やり方、対象）の見直しを考えてみる。
- ・湿原の大切さを自分にとっての里山として認識する。
- ・自然再生を身近な存在に
- ・市民の認知が不十分。道新にお願いし、土曜日の夕刊の別刷でPRできないか？（特集記事）
- ・湿原を見る新たな視点（気球ツアー）
- ・分かり易い自然再生のパンフレットがあるといい。
- ・地元関係者のヒアリングを継続的に実施する。
- ・自然再生（湿原）が地域経済と結びつくように
- ・「自然再生」の言葉を例えば「自然回復」とかに変え、関わる意義を強める。
- ・ワンダグリンダ応募パンフを有効活用（10000枚もある）
- ・わかりやすいPRツールの工夫
- ・協議会としての情報発信の作戦づくり
- ・かならずしも柱①→③に移行しなくてもいい
- ・3つの柱の各々のスペシャリストがいてもいい。
- ・とにかく得意分野で「参加」を（評論家×）